

教育キャンプ指導経験が教師効力感に及ぼす影響

山口 大樹

(京都教育大学大学院)

1. 目的

本研究では教師効力感を高める要因として、教育キャンプ指導に着目し、大学在学中の教育キャンプ指導経験が教師効力感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

「教育キャンプ指導」のほかに、「学校ボランティア・学習支援員等」、「塾講師・家庭教師等」、「課外活動」の計 4 つのカテゴリーを設定し、「教師効力感尺度」を用い、各活動の大学在学中の経験日数による教師効力感の違いを比較検討した。

調査対象者

- ① 現職教員 (146 名)、② 現役大学生 (110 名)
- ③ 2019 年度教育キャンプ指導学生 (11 名)

① に対してウェブアンケート調査を 1 回、② に対してアンケート調査を集合法にて 1 回、③ に対してアンケート調査を 2019 年度の教育キャンプ指導前と指導後の 2 回、集合法にて実施した。

分析方法は、IBM SPSS Statistics 26 を用い重回帰分析、分散分析、多重比較、t 検定を用いた。

3. 結果と考察

1) 現職教員について

4 つの活動の経験日数を独立変数とした重回帰分析の結果、教育キャンプ指導がその他の活動より有意に教師効力感に影響していることが明らかとなった。次に、活動ごとに大学在学中の経験日数を低群、中群、高群の 3 群に分けて分散分析および多重比較を行った。その結果、教育キャンプ指導において指導日数が多いほど有意に教師効力感合計得点が高いことが明らかとなった ($p>0.5$)。特に「児童支援」因子では 5% 水準で有意差が認められ、教育キャンプ指導日数が多いほど問題を

抱える子どもへの対応力が高いことが明らかとなった。その他の活動については経験日数による有意な得点の向上は見られなかった。

2) 現役大学生について

現職教員と同様に各活動の経験日数を 3 群に分けて分散分析および多重比較を行った。その結果教育キャンプ指導において、指導日数が多いほど教師効力感合計得点が高まったが 10% 水準の有意傾向が見られたことにとどまった。各因子では「学級経営」因子において分散分析の結果 5% 水準で有意差が認められ、多重比較の結果、低群と高群の間に 1% 水準の有意差が認められた。その他の活動については経験日数による有意な得点の向上は見られなかった。

3) 教育キャンプ指導学生について

教育キャンプ指導学生の 2019 年度の指導日数を 3 群に分け、指導日数に大きな差がある低群 (3 名) と高群 (3 名) について事例的に個別の検討を行った。その結果、教師効力感合計において、指導日数が多い高群 3 名は 10 点以上の得点向上が見られるが、日数が少ない低群 3 名は得点の向上が 5 点以下であった。「学級経営」因子については高群全員の得点が向上し、低群全員の得点が低下した。その他の因子については高群と低群で変化の違いは見られなかった。

4. 結論

現職教員においては大学在学中の教育キャンプ指導経験が豊富なほど教師効力感が高く特に児童支援に関わる教師効力感が有意に高いことが明らかとなった。現役大学生については、在学中の教育キャンプ指導経験が豊富なほど教師効力感が高くなることが示唆されるが、指導経験者のサンプル数が少ないことが今後の課題としてあげられる。